

## 最近在日本出版中国関連書籍報告（2006.9－2007.8）

藤 田 昌 志

关于最近在日本出版的中国书籍（2006.9－2007.8）

### 《提纲》

日本前首相小泉 2006 年 8 月 15 日参拜了靖国神社，这使得日中关系最恶化。继小泉成为日本首相的安倍首相关于参拜靖国神社以不表明去不去参拜的姿势暴露出来他自己含糊两可的特征。安倍首相成为首相不到一年而引咎辞职。

有关中国的日本报道 2007 年春天以后，坏消息比较多，比如侵害知识产权、农药蔬菜的污染等等。2007 年春天温家宝总理来访问日本，可是效果不大。日本和中国之间还有很深的隔阂。为了日中友好和日中人民互相了解，恳切希望这个报告能做出积极贡献。

### 一、序

2006 年 8 月 15 日の小泉前首相の靖国神社参拝は日中関係の最悪化を象徴的に表していたが、その後を継いだ安倍首相は靖国神社参拝について行くとも行かないとも言わないという発言で自らの曖昧性を露呈した。そして、一年を経ずして、首相を辞任した。

2007 年の春以降、中国に関する報道も知的所有権の侵害や、ダンボール入り肉マン（虚偽報道であることが後に判明）、農薬まみれ野菜等といったものが主で、春に訪れた温家宝首相の日本への友好のサインも功を奏しなかった感がある。日本人はどうやら日清戦争以来の中国蔑視、中国軽視を改めたくないようであり、台頭する中国に不安と苛立ちをつのらせているようだ。現状を正確に認識しようとし、無知で、学ぶことを知らぬ日本人ほどその傾向が強いようである。本報告が中国理解、ひいては、中国理解を通しての日本理解、アジア理解に役立つならば幸いである。現実の世界には全き善もなければ全き悪も存在しない。ナショナリズムは（仮想）敵の存在によって自らの形を明瞭なものにしていくことを忘れてはいけない。2007 年は日中国交正常化 35 周年であった。100 年の大計で隣国とつきあっていきたい。

### 二、李年古（2006.9）『日本人には言えない中国人の価値観 — 中国人とつきあうための 68 の法則 —』学生社

本書は中国人の価値観を、さまざまな視点からカバーすることを動機として、「ビジネス

マン向けで、彼らにとってもっとも関心度の高い項目、あるいはもっとも誤解されやすい項目をピックアップして解説すること。」「ビジネスマンにとって最短の時間で、もっとも知っておくべき基本知識をカバーする本であること。」「できるだけ実例を豊富に取り上げ、わかりやすく、面白く読んでいただくこと。」にこだわって等身大の中国人を語 (pp. 4-5) ろうとした書である。また、日本人と中国人の間の最も大きな問題は「相手にたいする深刻な不信感が、いまだに取り除かれていないことにある」とする。「両国の人にとって、親日派・親中派などいない。その逆の反日派・反中派もいない。等身大の相手を理解することがなによりも大事なのだ。もし拙著がその一助になれば幸いに思う。」 (p. 6) というのは筆者の心情を赤裸裸に吐露した言葉であろう。以下、各章別に内容を考察していくことにする。

**第一章 中国人の伝統的な価値観**では中国人の価値観を形成しているのは儒教であるとし、儒教の中枢をなすキーワードは「礼」と「仁」であるとしている。「礼」は礼儀、社会規範であり、「人間の欲望を制約するため」につくられたものであるとする。「礼」を外圧的なものでなく、「内在的な道德理念」にさせるため、「仁」=家族、隣人への愛を持ちだしたとする。

中国人が父母に対する愛=孝を非常に重んじることを示す面白い例を挙げている。自分の妻、子供、母が同時に川でおぼれて、一人しか助けられないとき、中国人が助けるのは母親である。なぜなら妻は又、めとることができるし、子供も作れるが、母親は一人だけだからと言う。中国人は血縁関係をあらゆる人間関係の中心に置いていると李年古氏は言う。

中国は「人治」が優先すると言うが、それは法が統治者のためのものであったために法律を遵守する意識が薄いからであるとする。また、『礼記』に「礼不下庶人、刑不上大夫」(「礼は民衆には下らない。刑は大夫(高級官僚)には及ばない。」)とあるように刑法はあくまでも民衆をコントロールするための道具であった (p. 29) と言える。

**第二章 金銭観**では日中の金銭観の相違について言及している。中国人は「独身の人は誰もが、給料のほとんどを友達との食事代にあてて」いて、お金を借りてでも友人に贅沢な料理を食べさせるのが、李年古氏の世代(40代後半(2006年時点))の金銭観、友人観であると言う (p. 36)。今の若者は流行に敏感だから、流行っているものにどんどんお金を費す。最近の中国では「三分の一が三分の二を使っている」という言葉があり、これは子供の数は家族の中で三分の一しか占めないが、使う金は世帯収入の三分の二を上回っているという意味だそうだ。「小皇帝」は健在であるようだ。金銭観には地域差が大きく、上海人は衣服には金を使い、合理性を重んじ、北京人は金に興味が薄いが自分の名誉や面

子のためには金を喜んで使い、広東人は金を世の中の判断基準としていると言う (pp. 44-49)。

**第三章 商売観**では、中国では商人に対する不信感が根強く、それはきわめて根深いと言う。「重農抑商」は農耕文化に基づいた、中国歴代王朝の不動の国策であり、中国の伝統的価値観では社会的な地位は財産ではなく、権力の大きさによって定められていた (p. 52) から商人は貧乏な農民より社会的地位が低かった。

中国の商人はいくつかのタイプに分かれると言う。1つは「官商」タイプで、「官商」とは政府の官僚という身分を持ちながら商売をしている人間を指す。その特徴は官僚の権力を生かして、商売を独占的、もしくはかなり有利な立場で行うことにあるが、この十数年の間に官僚に対する政府の制約が厳しくなってきたこと等によって衰退しつつある。もっとも一部の地方、業種では依然として暗躍していると言う。「儒商」タイプは商人と儒学をミックスした、高い学歴を持ちつつビジネスに取り組んでいるタイプで、儒教的道徳を持ってビジネスを行っている人々である。彼らは利益を求めだけでなく、その手段の是非を常に問う。「皮包商」タイプは「皮包」＝「カバン」に会社の全財産をつめているタイプで、その会社の実態はないが、中国人はこのタイプに非常に興味を持っている。資本なしで、智恵や弁舌でおいしい商売になるからである。

一般に北方の中国人は人情優先型の人が多く、商売は人間が付き合うための手段と思っている面があると言う。それに対し南方の中国人は商売にたけている人が多く、抜け目がないと言われる。

**第四章 職業倫理観**では“勞心者治人、勞力者治于人”(「頭を使う人が人を管理し、体を使う人が人に管理される。)」という中国人の職業に対する考え方は孔子の時代に定着したとしている。また、中国では職業で人の身分を決めてしまい、もっとも地位の低い職種は“伺候人”(使用人のような職業)で、サービス業であると言う。中国のサービス業関係者の愛想の悪さは社会的地位の低さのために、彼らが軽蔑されることを恐れて、過剰反応を示しているにすぎないと説明しているのは新鮮である。日本人はそうしたことを理解せず、中国人を見下すことが多いから注意する必要があるであろう。

**第五章 仕事・就職観**では中国人は権力を持って人を動かしていくのが理想的な仕事だと考えていることが述べられている。また、仕事は「体面」であり、鄧小平が改革・開放路線を取り入れた 70 年代以前は「体面」のある仕事と言えば、官僚であったが、70 年代以後はある調査によると「市長」が第一位で、次いで「政府部長」(＝大臣)「大学教授」「IT エンジニア」「裁判官」「検察官」「弁護士」「ハイテク企業技師」「党・政府幹部」「自然科学者」の順となっている。

**第六章 男女観**では男性の女性化、女性の男性化は中国でも進んでおり、女性は経済的独立性を持ち、家庭でも職場でも地位が高いことが述べられている。

中国では奥さんが美人なら、他人はそれは男の事業の成功によるものだとみる傾向があり、男性が女性を妻に求める場合、相手が自分より若いのは最低条件であるという。また、40才を過ぎたら男性は自分の娘や孫の年齢の世代から妻を探し「老夫若婦」は人々の羨望の的であると李年古氏は言う。日本とはかなり違う。女性が男性を選ぶ場合の最大のポイントは才能があるかどうか、その証拠として事業で成功をおさめているかどうかの一点につける。また、「穩健」（＝「穩健で言動が慎重深く、男としての重みがある」）が理想とされる。

**第七章 交友観**では中国人が血縁の次に重んじる「朋友」について述べている。「朋友」の「朋」の字は二つの「貝」が並んだものであり、「友」は右手と左手を意味することから「朋友」ということは互いに不可欠で平等である関係を表している和李年古氏は言う。中国人にとって「朋友」はまず平等であることが重要、そして互いに選択しあう関係であることが血縁、地縁、婚姻の関係（＝自由選択ではない）と根本的に異なることによって重要であるとする。中国人と友達になるには時間をかけて、同時に頻繁に会うことが必要である。そして中国人の場合、「自分の私事を気にせず相手に平気で話す。こういうオープンな態度から、朋友の関係に入っていくことが多い。」（p. 141）。ここに中国人と日本人の違いがあり、日本人の場合は日本人特有の「個人主義」があって、あまり友達のプライバシーには立ち入らないようにするのが礼儀と考えられている。根掘り葉掘り個人的なことを聞いてくる中国人は日本人に敬遠されることが多いが、文化の違いであるから、適当なところで折り合いをつけるしか仕方がないようである。

**第八章 同僚観**では中国人が「属人的」性格が強く、企業のためというより「上司」のために仕事をする傾向が強いことが述べられている。また、理想的な上司とは、家長のような存在で、部下と同じ視線でものを見る人、「可親可敬」（「親しみやすく、尊敬できる」）であることだと言う。

**第九章 対日観**では中国人の日本観は一般的には顔が見えない日本人に対してイメージが悪く、マイナスの印象でとらえられることが多いとする。また、マスコミが政府によってチェックされていることが、その分インターネットによって不平不満をすくいあげる結果を招き、インターネットでの反日批判が増大していると言う。2005年の反日デモがインターネットによって起こされたものであることは記憶に新しい。中国人が日本の侵略をいつまでも厳しくとりあげるのは、日本の文化的ルーツは中国であるのに近代に入って兄（中国）が弱くなったときに、弟（日本）が力をつけ、兄は弟の恩返しを期待したが、弟は兄

を殺しにやってきたという意識が中国人にあり、それは韓国人にも同種のものがあると言う (p. 182)。日本人の「<sup>おご</sup>驕り」ということを日本人は直視しなければならない。

第十章 日本人経営者への提言では会社組織を家族化すること、「人情」を重んじ、社員が社長に愛されていると感じるようにしないといけないと言う。最後に李年古氏は次のように述べている。「日本人のなかには、ときに中国人を見下そうとする人がいる。その傲慢な態度は、本当の軽蔑というよりも、日中の長い歴史のなかでの「中華思想」にたいするある種のコンプレックスのあらわれにすぎないようだ。つまり、日本人として、相手に見下されないために虚勢を張っているだけのことだ。一方、中国人の嫌日感情のなかには、対日コンプレックスの一面も見え隠れする。」 (p. 206)

日本と中国の間には深く暗い溝が存在する。少し襟を正して考えてみればお互いに相手のことを何も知らないことに気付く。何も知らないという現実を直視し、互いに相手のことを知るために李年古氏の本は役立つことであろう。

### 三、大石裕／山本信人編著 (2006. 10)『メディア・ナショナリズムのゆくえ』朝日新聞社 朝日選書 807

本書は「マスメディア、およびインターネットなどのニューメディアの普及が、国民国家のナショナリズムを増幅させる一連の現象」と定義される「メディア・ナショナリズム」という概念を中心として、主として 2005 年に中国で生じた「反日」運動、そしてそれを契機に高まった日本社会のナショナリズム意識を扱ったものである。

第 1 章 「メディア・ナショナリズムを考える」では、メディア・ナショナリズムの問題について、戦後日本社会を素材に論じている (p.10)。戦後日本社会でナショナリズムは戦前の「愛国心」と結びつけられることで、一般には否定的意味を付与されていたが、日本が経済大国となることで国際的地位を持つに至って、日本見直し論が活発になり、日本人論、日本文化論が 60 年代から流行した。しかし、90 年代にアメリカ経済が復活し、近年、中国経済が急成長し、経済面での日本社会の「自信」は低下する。更に「安全安心社会、日本」というイメージが 95 年 1 月の「阪神・淡路大震災」、同年 3 月の「地下鉄サリン事件」によって揺らぎ、日本社会の持つ危険性と脆弱性が浮き彫りになった。2001 年 9 月の同時多発テロ、その後のアフガン戦争、イラク戦争においてアメリカのマスメディアは大部分、「テロリスト・テロ支援国家」対「米軍・多国籍軍」という図式を採用し、日本のマスメディアもそれをほとんどの場合、踏襲した。小泉政権の発足以来、小泉首相の靖国参拝、歴史認識の問題がクローズアップされ、加えて日本の国連常任理事国入りの問題が具体化し、反日意識が高まり「反日」運動が高まったが日本のマスメディアはその模

様を積極的に報じ、日本社会でも反中意識が高まった。小泉首相の靖国参拝に関して、朝日新聞は強く批判したが、読売新聞は最初、参拝を国内問題とし、後に参拝に慎重ないしは反対の論調となった。参拝賛成という世論は、反中、反韓意識と連動しながら、一定の勢力を保ち、一部のマスメディアで繰り返し表明され、ネット上の世論が後押しする形でナショナリズム意識の高揚に寄与してきたと言える（p. 34）。

**第2章 日本の新聞は「反日」デモをどう伝えたか**では、日本の全国紙がこの出来事をいかなる観点から報道したかに関して分析を行っている。それにより、全国紙の論調の差異が明らかにされている。（p. 10）

2005年4月の「反日」デモについて、朝日、毎日、日経はデモや中国政府を批判するとともに、日本政府（とくに小泉首相）にも反省すべき点があるとする論調であったが、読売及び産経はデモや中国政府を批判するとともに、日本政府（小泉首相）に毅然とした対応を要請（p. 51）した。

「反日」デモ報道によって反中意識が高まり、それがナショナリズム意識の高揚へと結びついている。また出来事を「紛争・対立」の文脈で報道する傾向やその過激さを強調するメカニズムは、すでにジャーナリズムがニュースを生産する技法の中に組み込まれている（p. 65）。もはや新聞やテレビの報道を鵜呑みにする時代ではない。マスメディアは国民が監視しなければならない時代に入っている。

**第3章 中国のインターネット言論と「反日」デモ**では、中国社会で急速に普及しつつあるインターネットが、「反日」デモと中国国内の世論に及ぼした影響について詳細な検討が行われている（p. 10）。

中国のネット言論をめぐって特に注意すべきは、ネット言論を「行き過ぎたナショナリズム」と危険視する、単純化の危険性に陥らないようにすることであり、玉石混交の中国ネット言論を検証する方法論をみつけること等であると言う。

一連の2005年4月の「反日」デモの契機は日本の国連常任理事国入りをめぐる問題であり、「アジアに予定されている2議席のうち一つは日本へ行くだらう」という3月21日のアナン発言への反対署名の呼びかけがネット上で行われ、更に日本製品ボイコットの呼びかけがネット上で行われた。そしてネット上でデモ参加の呼びかけメッセージが流され「反日」デモとなったと言う。「反日」デモに見られたのは、中日間の問題だけではなく、中国内部の分裂と緊張であった（p. 109）とする視点は正しいものであろう。

**第4章 中国の報道統制**では「反日」デモに関する中国主要紙の新聞報道、およびマスメディア（とくに新聞）に対する統制の状況について論じている（p. 10）。愛国主義教育が反日教育に結びついたかの記述がある（p. 121）がそれは誤りであろう。「抗日」の歴史

を教えることは「反日」には直接結びつかない。「小報」(党機関誌の「大報」に対して、庶民的な内容と商業的色彩の強さによって特徴付けられる新聞)が台頭し、「日本批判」の情報が商品価値を持ち始めたことは背景として新聞報道に大きな影響を与えたと言える。対日報道は日本を右傾化したものととらえたり、あいまいな態度をとっていたりするものもあったが、共産党がデモの行き過ぎが望ましくないと判断した4月20日以降は愛国の情熱を正しいとしながらも、愛国の表現のために許可のないデモを行ってはならないというものになっていった。対日言論統制は当然のことながら共産党の権力の正当化を目的として行われたものであると考えてよいであろう。

**第5章 香港の「反日」デモ報道**では香港メディアがどのように「反日」デモを報じたかという問題について検討している。香港の中立紙には「理性的な対日行動の重要性」を強調する論調が共通して見られ、左派系紙は大陸の反日デモが比較的理性的であったと説明し、このデモの責任は中央政府ではなく日本にあると繰り返し強調する社説を発表していたが、これは、香港の対日ナショナリズムに対応しようとした結果である (p. 153) と言える。

**第6章 中国における国民ナショナリズムの登場**では「愛国(主義)」というキーワードとの対比から中国のナショナリズムの問題について論じている (pp. 10-11)。「愛国」はナショナリズムの一要素ではあるが、両者は同義ではなく、「愛国」は一言で表すと「家族愛」のようなものだという (p. 167)。他方、ナショナリズムは常態的に発現されることはなく、「われわれ」に対する「かれら」を指定する政治的文脈の中で形成され、刺激(確認)される (p. 167)。

中国ナショナリズムは形成された19世紀半ば以降、伝統的に強い国家像への羨望が主軸にあり、そのベクトルと愛郷心的な愛国主義的ベクトルとが化学反応を起こしながら、展開していった。1990年代以降、中国ナショナリズムが脚光を浴びようになり、中国共産党主導の政策はナショナリズムである「国家ナショナリズム」が突出し、「愛国主義教育」がその一環として位置づけられた。愛国主義教育の中身は①中国の伝統と歴史の重視②領土領域の鮮明化③国家統合の3点であるが、「対日・抗日という公定史ではあっても、「反日」が基本になっていないことは確認すべきであろう」(p. 170)としていることは正論であろう。

国家ナショナリズムが社会へ浸透していく過程で、90年代半ば以降、国民ナショナリズムという愛国的感情が登場する。国民ナショナリズムが「消費」の対象となり、人々は書籍、活字メディア、インターネットというメディア空間でナショナリズムを「買い」又「謳歌」した (p. 172)。ナショナリズムの「市場」の中で2005年の「日中摩擦」、「反日」運

動が起こったとするが正しい認識であろう。中国の国民ナショナリズムは何か本質的なもの、あるいは恒常的なものというよりも、突発的に発現し、消滅する性質を有した現象であると考えの方がより実態に近く、中国において新たな「市場」形成の契機が生まれることで、形を変えた新種の国民ナショナリズムが登場する可能性は高い (p. 179) とする洞察は鋭く、中国の国民ナショナリズムが流動性を孕<sup>はら</sup>んでいることを示唆している。

第7章 米英メディアが見た日中摩擦では、米国と英国のメディアが、「第三者」的立場から、この問題をどのように報道したかという問題について、歴史的な経緯も踏まえて論じている (p. 11)。「反日」デモに関する報道において米英メディアはともに中国を厳しく批判する論調を展開し、概して中国が「非民主的」国家であることを指摘している。日本に対する米英メディアの論調やイメージは05年5月以降、中国に対する手厳しい批判が後退し、それに替わり、日本の歴史認識やナショナリズムの顕在化を問題視する報道が目立つようになった (p. 214)。米国では中国のイメージは60年代末からの30年間で「敵から同盟者へ、再び敵へ、さらには(天安門事件を契機として)野蛮な敵へ、そして90年代後半以降はイメージが複雑化」(p. 194)するという流れの中にある。

補章 日中摩擦と中国の民間ポータルサイトでは中国の民間ポータルサイトの現状、及びネット上で日本関連のニュースがどのように掲載されていたかという問題を中心に検討している (p. 11)。世界一の中国語ポータルサイトと言われる新浪網 (SINA ネット) は日本の国連常任理事国入り反対の署名ページには35万7千人が署名し、世界抗日戦争史実維持連合会が国連のアナン事務総長に提出した反対署名は世界41か国から4200万人によるものとなった (p. 223)。

中国の民間ポータルサイトは海外で留学や仕事をした経験のある人が個人の経験や人脈を生かして立ち上げたもので、主要収入源はインターネット広告、有料体験サービス (モバイルサービスとオンラインサービス) そして電子取引の三つである。新浪、搜狐 (sohu)、網易 (netease) を3大ポータルサイトと呼び、04年に中国のポータルサイトは安定成長期に入っている。

「反日」運動の際、ネット上で掲載された日本関連ニュースには日本の国連安保理常任理事国入り問題、靖国神社、歴史教科書、「東海」(東シナ海) 等がある。

今後、注目すべきはインターネットの双方向性で、一方向の従来型メディアと違い、ポータルサイトでは集中する報道に利用者のコメントが集まり、それらに掲示板「論壇」での書き込みなどが加わり、大きな影響を与える「ネット世論」が浮上する (p. 236)。今後、ネット世論から目を離すことはできないであろう。

本書を通読して思うのは、すぐれた内容であるにもかかわらず、文章が硬すぎるという



ことである。それはとりもなおさず、中国についての研究が一部、研究者に独占されていることを象徴的に物語っているのかも知れない。中国との関係は日本にとって、日本の将来を大きく左右するものとなり、東アジアの安定は世界にとって重大な意義がある、とは過去ずっと言われてきたことであるが、中国における日本の国連常任理事国入り反対や愛国主義の中に、中国国民の「思い」をとらえ、よりよい日中関係を作っていくことは大切なことである。私は日本が経済的に豊かになったことが、かえって日本の目を曇らせているように感じる。日本人の中国、韓国、北朝鮮への差別意識は厳然と存在するのであり、経済的豊かさとは別種の豊かさを東アジア、ひいてはアジアの中に見い出せないかぎり、日本は「アメリカの追従者」そして「アジアの孤児」であり続けるであろう。

#### 四、田中直樹 (2006.11) 『「反日」を超えるアジア』 東洋経済新報社

本書は中国だけでなく韓国等も視野に入れ、更に 19 世紀以来の東アジア史から日本と中国のよりよい今後の関係を模索した本である。

序章 アジアの「招集能力」はどこにあるかでは第二次世界大戦後の日本が近隣アジア諸国に経済援助を中心として大きな貢献をしたことを忘れる人々はいないが、他方、21 世紀における新規市場が中国を中心として生ずるであろうこともその人たちにとってほぼ明らかなことであるとし (p. 17)、「過去の貢献」を重んじるか、「未来の機会」を優先するかというテーマに彼らを追い込んだのが「中国の賛同を得ずして提示された安保理常任理事国入り構想」であったと述べている (p. 18)。そして結果としては「日本の安保理常任理事国入りに距離を置く態度をとらざるを得なかった、というのが近隣アジア諸国の総体であり、我々は「外交上の大きな失敗を通じて日本の立ち位置を知ることになった」とするが、果たして、「外交上の大きな失敗」という認識が今の日本人の多くにあるだろうか。

第 1 章 なぜ一九世紀からの東アジア史に遡らなければならないかでは、1846 年の「穀物法廃止」によって英国の中心が地主勢力から産業資本に移ったことを指摘し、そのことが日本が中国のように植民地化せずすんだ主たる背景であることを述べている (pp. 29-30) (穀物法の廃止は「海外から安い穀物が入る仕組みを作ることにより、土地を持つことによって得られる地代の意味」を一挙に低くさせた (p. 29))。田中氏は第 5 章でも再度、1846 年の穀物法の撤廃によって 1850 年ごろから英国産業資本の確立過程が明瞭に観察されることになった (p. 205) と述べているが、それは日本を知る際の世界の状況把握の必要性を重視しているからにほかならない。日本がウエスタン・インパクトを成功裏に乗り越えてからその後、対外侵略へ進んだ理由については自己満足 (コンプレイセンシー) が日本の指導者の間に出てきたことと、国際的なリアリズムの感覚が指導者から消えていっ

たことに求めている (pp. 31-35)。朝鮮半島の南北分断は偶然の、全くの成り行きだったとし (p. 36)、韓国の知識人にはそれは到底、耐えられないことだったとする。日本人は日本における青少年用の歴史教科書を自ら作成する必要がある、その前提として戦争責任の問題を他国の指摘を待つまでもなく、「我々の手で明らかにする必要がある」(p. 40) と述べているが、今後、近隣諸国と友好関係を築いていくつもりなら当然避けて通れない問題であろう。日本人は経済的優位による無意識の「傲慢」に気付かなければならない。

第2章 韓国・中国の勃興がきっかけとなる歴史の新たな分岐点では、21世紀に入って韓国政治を担う世代が一挙に若返ったが、2002年の大統領選挙で盧武鉉大統領が当選した背景には、ネット革命と2002年のワールドカップがあったと言われるとする (p. 53)。その背景にある世代層を「386」と呼び(「3」は20世紀後半に30歳代、「8」は1980年代前半で大学生であったことを、「6」は1960年代生まれをそれぞれ表す)、彼ら世代の持つ「統一国家のまま戦後復活を迎えることができた日本に対する心理的反感」(p. 56)に言及している。中国については「なぜ日本を対象とした暴動が起きる可能性が高くなったのか心配を行うべき」(p. 63)であるとし、又、共産党による民衆の制御は難しくなってきたることにも言及している。

第3章 東アジア各国は米国史とどのように遭遇したかでは、100年前のアメリカと同様、現在の中国では所得格差とそれに伴う社会不安が増大していることが指摘されている。アメリカの「マニフェスト・デスティニー」(旧世界と区別される新世界としてのアメリカに存在する「明瞭なる宿命」)と中国の「ミドルキングダム」(自らの内に華、中心があるとする世界観)が今後、どのような相互関係に入るかは今後の世界を見る上で極めて重要な視点になるとする (p. 94)。韓国が海洋的発展と大陸的発展のどちらを今後、採用するか、インドのITパワーが今後、アメリカ経済とどのように緊密性を保っていくかにも注目しなければならない。田中氏は時間軸と空間軸で東アジアを分析する。

第4章 グローバル化する東アジアにおける代替と補完では、2003年以降の日本経済の回復は、いわゆるケインジアンも、マネタリズムも、制度学派も乗り越える形で生じ、一国経済モデルによる予測力が否定される中で、東アジアのグローバリズムにおける代替と補完は完成度を高めているとし (p. 152)、東アジアのグローバリズムの中で中国をどのように規律づけるかが今後の知的作業であると述べている。

第5章 帝国主義、共産主義、覇権主義、地政学の縛りを越えてでは、過去の歴史と「主義」の関係を再度、認識しつつ「民主主義と市場経済との結びつきを強調した上で市民の立場からの能力構築を考えなければ、契約を通じての国家作りという思索上の原点に遡ることはできないであろう」(p. 196)とする。

第6章 二一世紀の東アジアと日本の位相では、日本の近代化における「悲劇の根」として①アイデンティティの確立過程において勤皇思想、天皇に「操作性」が伴ったこと②近代化過程そのものに「他力によって生かされる」という認識（＝筆者注：世界の情勢、流れの中で生存していくという認識）が欠けていたこと③日本を取り巻く国際情勢の中で、日本がモデルとすべき持続的なものを見出すのに極めて不利な環境が続いたこと（＝「上からの改革」を不可欠だと認識したことと、市民主義等に関わる対米認識の欠如。）を挙げる。この3つのために日本においては「近代化過程の制御を市民の手にゆだねることができなかった」（p. 207）とする。日本は今後代替と補完のグローバルな関係のもとにおいて選択と集中を強化し、「付加価値ベース」を広げていくことによって、東アジアにおいてその位相を明瞭にしていくべきであると述べている。（p. 231）。

田中氏はネーション・ステート・モデル（経済政策の効果を一国内のみでとらえる一国経済モデル）が妥当性を失ったのを1984年とする（p. 128）が、それは英国経済モデルをアメリカにも適用しようとした覇権変遷論に大きな変化を迫ることになったと考える（p. 133）。産業化とともに貿易黒字が膨らみ、次に対外資本投資を行い、その結果、資本収支赤字が基調となるという道を歩んだのがイギリスであるが、それと異なりアメリカは1980年代以降、「核の傘」「ドルの傘」を揭示するモデルから、インフレ抑制を旨とした金融政策による経済の秩序化の担い手へ変容し（p. 140）、そのアメリカから発せられたグローバルオーダー（地球規模の秩序）に最も本格的にスペキュレート（投機）したのが東アジアの国々であったとする（p. 140）。田中氏のとらえる東アジアはアメリカ、世界との関係における東アジアであり、その関係は同様に日本、中国についても言え、アメリカ、世界との関係における東アジア、その東アジアとの関係における日本、中国なのであった。広く深い視野を持つ田中氏の本書は難解ではあるが、示唆に富む、現在の東アジア理解の必読書と言える。

##### 五、田島英一（2007.1）『<sup>もてあそ</sup>ばれるナショナリズム—日中が見ている幻影』朝日新聞社 朝日新書 027

本書は異なる「環境」「文脈」を超えて、自分の背負っていた文脈を相手の文脈との関係によって意識化し、自分のアイデンティティを揺らがせ、「文化の壁」を超え、「自由」になろうとする書である。ここに言う「文脈」とは、通常言葉の意味を左右する前後の環境としての文の連なりの意味するところを指すが、筆者は広くその人や属する社会、国の価値観、物の見方（「色付きメガネ」の「色」）のことを指して言っているようである。

田島氏はある種、ヴィトゲンシュタイン風に「文脈」から自由であろうとする。田島氏

は中国を文官と文官予備軍としての読書人である「士」と「民」と「夷」の三つの層に分け、「土」(土着)と「洋」(舶来)の視点から分析する。孫文については血統主義と伝統思想を高く評価したとし、漢人の血統的「純粹性」が生んだ「中華文明」という「故郷」、そこへ回帰するための同化(純潔漢人の個体数増加)とV字回復(振興中華)が孫文の「血統中国」的ナショナリズムであったと断じている(p. 106)。

中国人がいつまでも歴史問題をとりあげるのは日本人と中国人の「戦争体験の質の差」(p. 209)によると言う。日本人は沖縄以外では「地上戦」を経験していないが、中国人の場合は「民」の世界の大半を占める農村に日本兵がいきなり乱入してきて、平和な村を戦場に変えてしまった、その記憶は醜いものであり、「地上戦」を中国国民は経験した。その「地上戦」とは「ことばも通じぬ異国の地上部隊が突然自分たちの生活空間に押し入り、戦闘で人を撃ち殺し、目の前で家に火をかけ、女性を強姦し、金品を奪い、抵抗する者を殺す。空襲なら、敵の顔までは見えません。生身の敵が愛する者に手をかける情景がすべて記憶に刻まれてしまう。」(p. 210)というものであった。死者に対する日中間の考え方の相違を言う前に、こうした事実を知っておく必要がある。(日本ではこうした日本人の中国での蛮行を文字でとりあげることは少なく、1954年生まれの私の印象に残るところでは遠藤周作の小説『スキャンダル』の中の一部がその代表的なものとしてあるぐらいである。日本人は過去のおぞましい事実から目をそむけようとしてきたと言われても仕方がない。)

伍子胥(仇敵である楚王の墓を暴いた)や秦檜(宋代に国を売った)を例に出して、中国人の「しつこさ」を指摘する声があるが、それは「憎悪や怒りの表現方法の差」であって、中国人が本質的に偏狭で執念深いことの証明にはならない。春秋戦国時代の人物と現代中国人を共に「中国人」と呼ぶことには、聖徳太子と織田信長と山本五十六を並べて「日本人」を論じることと同様、ほとんど意味がない(p. 212)。「文化の相違は配慮の対象ではあっても、対話を放棄する口実にしてしまってはいけない」(p. 212)と言うのは正論である。「愛国主義」教育を「反日教育」とであると称し、不満のはけ口を「反日」に求める中国共産党の陰謀だといった言説(筆者注:ここに言う「言説」とは「あることばやことばの束がある文脈で特殊な意味合いを持つような場合」(p. 12)のことを指して言う。))も同次元のいい訳にすぎず(筆者注:=文化、制度の相違を対話を放棄する口実にしている)、文化や政策のせいにするこれらの言説が共通して隠蔽しようとする事実「中国人も我々日本人も同じ喜怒哀楽を分かち合う人間なのであり、中国人の怒りは人間として自然な反応であるという、実に単純な事実」(p. 213)である、と言う田島氏は中国人と同じ目線で、日中間の溝を埋めようとしている良識ある研究者であると思う。

中国人が「日本は一度もきちんと謝罪したことがない」と言うことについては文化の相違への配慮という点から次のように説明する。日本人と中国人では「謝罪」の定義が異なる。日本社会には「始末書の発想」が、中国社会には「検討書の発想」が広範に浸透しており、「始末書」において大切なのは、「真摯な反省が形式的に表現されている」点であるが、「検討書（反省書）」においては再発防止が論理的に保証されておらねばならず、つまり「必ず過ちへといたる過程と様々な起因を分析し、次にどうしたら同じ過ちの繰り返しを防げるかを考察し、最後に上司や同僚の批判を請」わなければならない(pp. 213-214)。中国人が「日本は謝罪しない」と言うのはつまり自己批判、自己総括を基礎とする「検討」ができていないということだ(p. 215)と田島氏は言うが、「謝罪」をめぐる新しい説明であろう。従来は過去の歴史を重視するかどうかという一般的視点からしか論じられなかった「謝罪」問題が違う視点から説明されているのは新鮮である。相手の気持ちを理解しようとする意識から出た視点であろう。

## 六、その他

王敏(2006.10)『日中 2000 年の不理解 — 異なる文化「基層」を探る』朝日新聞社 朝日新書 008。

本書は「日中文化を合わせ鏡の比較法で観察しながら、自問自答を繰り返して得られた未熟な試論」(はじめに p. 5)である。所謂、日中比較文化論の入門書、参考書のようなものであるが、従来の日中比較文化論が中国だけ研究している者が印象批評風に自分の考えを述べたものか、日本や中国への留学経験者がこれもやはり印象批評風に文を綴ったものが多く、客観性に乏しいことから学問、研究として正統なものとは考えられてこなかった嫌いがあるが、中国の躍進によって、経済的に切り離せない関係に日中間が成っていることを考えれば名前はどうかあれ日中比較文化論的な研究は現在、最も必要とされるものであろう。本書はその意味で従来の研究をトレース(追跡)する上で役立つ。逆に言えば人の言ったことを要約して、それに自分の考えをつけ加えた感がある、少し「悪擦れ<sup>ず</sup>」した本である、と言えは意地が悪いだろうか。

第1章、第2章で述べられる日中の動物観の違いはよく言われることである。第3章で「裸」にこだわらない日本とそうでない中国も従来、断片的に言及されていたことである。その他、日本の「水に流す文化」や日本における「儒教」の表層的理解も目新しいことではないが日中比較文化論の基礎として知っておく必要はあるであろう。

王敏氏は「先述の諸著作が理念型の文化の枠組みで日本文化を見つめることに共通しているところがあるが、感性豊かな自然融合感を文化に成就させてきた日本文化を深層から

理解しようとする研究姿勢は貴重だと思われる」(p. 237) と言う。これは王敏氏のオリジナリティーの存する視点である。「小著は日本人論、日本文化論の範疇に属するかもしれない。日本文化を感性文化と特色付けて輪郭だけを描くことに主眼をおいた。」(p. 237) と言う。日本文化を「感性文化」と位置づける視点は重要だと思う。私は本居宣長の「唐心」に対する「大和心」を想起した。

王文亮 (2006.11) 『格差で読み解く現代中国』ミネルヴァ書房。

本書は「まえがき」にあるように格差の視点から現代中国を読み解くために、合わせて13章を立て、都市と農村の二重構造、農村、農業、農民のいわゆる「三農」問題、貧困撲滅をめぐる苦しい戦い、計画出産の是非、人口高齢化の課題と対応、公的年金制度、医療保障、失業保障、最低生活保障、教育のあり方、職業観の変遷、官僚の職権乱用と腐敗汚職の氾濫、余暇・レジャーなどを取り扱っている (i)。361 頁という大部の著書であると同時に、記述が極めて客観的資料に基づいているため、やや平板に流れる嫌いはあるが統計資料をながめるだけでも中国の各地域差等が理解でき (たとえば p. 12 の図 1-3 2005 年都市部 100 世帯当たり自家用車保有台数 (上位 10 地域) では北京が 13.3 台でトップであり、続いて広東 (9.2 台)、浙江 (8.6 台)、雲南 (7.6 台)、江蘇 (4.1 台) となっている。) 有意義である。中国の現実を知る上で具体的統計資料に基づく情報を入手するのは必須事項である。その意味で本書の意義は大きい。ちなみに著書は筆者の大学院時代に同じ専攻に属していた人でその温厚篤実な人柄は大方の人に愛されるところがあった。その如才ない人柄が著書にも表れている。

松本浩一 (2006.11) 『中国人の宗教・道教とは何か』PHP 研究所 PHP 新書 429。本書は「道教のさまざまな面を学ぶことは、中国社会・文化のさまざまな面を学ぶことにもつながるであろう」(p. 247) と道教学習の意義をとらえる視点から執筆された書である。松本氏は言う。「道教は (中略) 煉丹術・呪術儀礼の教理と実践、修行法に含まれる神秘、思想や独特の宇宙開闢<sup>びく</sup>論から、屈折した (あの世の存在を含む) 人間関係を反映する生々しい願いを表現したさまざまな呪術に至るまで、あらゆるレベルを含んでいる。」そして、その影響は中国人の生活・文化のあらゆる面に渡っており、道教の範囲は広く、そのため道教のイメージを結びにくくしている (p. 247)。そのような道教は、また社会の状況を忠実に反映しており、例えば中国を旅行した日本人は「儒教の経典などにみられる深い思想や高い規範意識と、現実の中国の社会にみるギャップに驚かされることがしばしばある」(p. 247) が、両者とも対立、矛盾なく併存し、二つながら真実である。道教儀礼もその中には矛盾するような原理が併存していることがある。そこから前述の道教学習の意義をとらえる視点に続くのであるが、著者は様々な面が混然一体となった中国を理解する切り口

の一つとして道教をとらえているようである。そこには道教の専門研究の「社会における存在意義」を自らに納得させようとする意向が看取される。

外丹に対して内丹は「身体を炉鼎とし、精・気・神を薬物として不死の身体を作り出す作業」であるが唐代を境として外丹から内丹へ道教の修行法の中心が移っていく (p. 57)。

内丹の修業の段階は築基 (身体の保養と準備) → 煉精化気 (= 小周天) → 煉気化神 (大周天) → 煉神還虚と進むが煉神還虚では「最後には煉養する神もなくなり、道と一体となって虚空に入ると説かれている」 (pp. 63-64)。神秘的である。筆者の回りで煉神還虚に到着した道教研究者は寡聞にして知らない。

道教の民間への影響は呪術師や呪文、符が担っているようであるが、道教研究は筆者の立場 (比較文化論) から言えば日本の様々な習俗、風習の解明に役立つと考えられる。盆の由来などにも道教は関係している。

阿辻哲次 (2007.1) 『近くて遠い中国語』 中央公論新社 中公新書 1880。

本書は「中国語が、実は私たちにとって完全な外国語であるという当たり前の事実をあらためて確認し、そこから出発して、中国語が私たちにとってもっとも学びやすい外国語であることを再認識していただくとの意図をもって書かれたもの」(はじめに x) である。

中国語が「完全な外国語」であるということについては第4章 中国人と筆談は可能かで特に詳しく述べられているが、単語としての相違 (“電車” (= トロリーバス) “正宗川菜” (= 「正真正銘の四川料理」) とともに、筆談が日本人と中国人の間で不可能であると次のように述べているのはとりわけ重要である。「同じ漢字でも日中双方の意味がことなることが日常的にある。そしてなによりも重要なことは、かつて日本人と中国人の双方が知識人必須の教養として身につけていた漢文 (古文) の素養が、現代人にはほぼ備わっていないという事実である。かつての朝鮮通信使と日本の僧侶や武士が筆談をかわせたのは、どちらにも漢文という素養があったからにほかならない。(中略) 簡体字の問題が存在しなくても、いまの日本人が中国に行って筆談で用が足せると思うのは大きなまちがいである。現代の日本人と中国人はおたがいに相手の言語を少しでも学ばないかぎり、筆談はできないのである。」 (pp. 153-154)

そこで、中国人と日本人が意志の疎通をするためには相手の言葉を学ばなければならないということになるのだが、日本人が中国語を学ぶ際に限定しても、日本語に比べて子音の多い、又、日本語にない四声のある中国語を日本人が学ぶのはそれほど容易ではない。その意味で「中国語が私たちにとってもっとも学びやすい外国語であることを再認識していただくとの意図をもって書かれた」本書は貴重な価値を持つはずであるが「中国語が私たちにとってもっとも学びやすい外国語」であるという説得ある記述は見当たらず、そ

の点が本書の価値を損なうことになっている。

趙無眠富坂聰〔訳〕（2007.2）『もし、日本が中国に勝っていたら』文藝春秋 文春新書 558。

本書は「中国人が頑なに信じてきた“日本人は悪の塊である”という定説に疑問符を投げかけている」（訳者まえがき p. 16）もので、日本人がこの作品に触れることの最大の効果は、「日本の読者にある種の安心感を与えることではないか」（同 p. 21）と訳者は言う。では、日本が正しく、あの戦争は日本の自衛戦争であったという視点からの本なのかと言うと、もちろん、そうではなく、要は客観的に日中近代史、現代史を再度、検討してみましようという内容の本である。「花園口の決壊（筆者注：1938年6月9日中国軍が日本軍の西進を阻むため、河南鄭州の東北部にある花園口で黄河を決壊させる目的で爆破を行い、堤を破った大水が、東へ流出、歴史上最も悲惨と言われる大洪水となり、390万人以上が行方不明、90万人が死亡した（pp. 152-153））、長沙の大火事（筆者注：1938年11月12日午前2時、湖南省政府が日本軍が近づいてきているとの情報（誤報であった）に接し、「焦土抗戦」に打って出、長沙の町に自ら火を放ち、門を閉じたまま焼き払ったために、少なくとも2万人が死亡し、宋明清それぞれの時代の図書や貴重な文書、名画や書がすべて灰となってしまった（p. 154））、延安の芥子栽培、わが国の軍隊と同盟軍による民間女性の強姦。これらはすべて一つの——反侵略戦争に勝つためには手段を選ばないという——問題である。そしてまた、目的の崇高さのためには手段の悪辣さには目をつぶるというものである。」（p. 159）と言う著者、趙無眠氏について訳者は「私が趙氏個人に感じた印象を言えば、彼は政治的なスタンスというよりも先に相当な皮肉屋であり、世に蔓延する“定説”に対し強い反発を覚えるタイプの人物のような気が」する（訳者まえがき p. 18）と述べている。中国近、現代史を振り返る上で一読に値する書であろう。善か悪かの二者択一論で日中近代史を割り切る時代はすでに終わりを告げようとしている。

齋藤<sup>まれし</sup>希史（2007.3）『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』日本放送出版協会 NHK ブックス [1077] は「近代日本のことばの空間を漢文脈という視点から考えることを主眼とした」（p. 3）書である。「漢文」ではなく「漢文脈」とするのは漢字片仮名交りの訓読文や漢文から派生した文体、漢文的な思考や感覚も含めて考えようという著者の企図に基づく（p. 3）。この視点は非常に重要で、中国文化の波紋が変形しどのように日本で広がるかを考えることは日本の独自性に焦点を当てる、センスのよい企図である。著者は夏目漱石について一貫して漢文脈の中にあった森鷗外と異なり、漢文脈から出発しながらも、いったんそこから離れ、しかし、「漢文脈の外部に立つ根拠としての写実主義や自然主義にも馴染めないまま、かといってまた漢文脈の中に舞い戻ることもできず、新たな文脈を作



ろうと格闘しているように見える」（p.212）と述べ、それを「西洋に対抗する原理としての東洋」と見なすことも可能であるかもしれないと言う。

漢文脈は東アジアにおける、世界を構成しうる唯一の文脈であった。脱＝漢文脈のためには外部に根拠が必要とされ、近代日本が自らの外部として選んだのが支那と西洋であった。そして日本は「支那に対しては、文明の側に立つ者として、西洋に対しては、東洋の文化の継承者として」（p.213）振る舞い、ヨーロッパの学問を修める者は前者に重きを置き、漢学や儒学を奉じる人々は後者の立場によって自らを補強した。後者の立場では、「支那」は外部というよりも下部になり、それ以前の関係を逆転するかのように、日本は東アジアの宗主国として振る舞うことになり、日清戦争の勝利がそうした観念に拍車をかけた（p.214）。

漱石の場合の「東洋」はそれとはやや異なり、漱石は「閑適」を「西洋への、あるいは文明への対抗原理として取り出そうとした」（p.215）と筆者は述べている。それは漢文脈の中からでなく、外から発想されているのであり、漱石の有名なことばを借りて言えば「外発的」（現代日本の開花）なのだ（p.215）と筆者は言う。近代日本のことばを漢文脈の視点から考える本書は一読の価値はある中国関連の日本語についての書物である。

佐藤一郎（2007.3）『新しい中国 古い大国』文藝春秋 文春新書 563 は古典、現代と限定した研究を廃することを提唱し、総合学としての中国学を標榜する。考えとしては誠にけっこうであるが全体として成功しているとは言いがたい。しかし、王国維は『紅樓夢』を「仏教の悲観哲学、すなわち無常感を踏え、人生の諸相を如実に示すことによって、解脱への道を説いたものである」と解釈したとし、これは「文学革命によってはじめて実現した古典小説再評価の方向を、先取りしたものである」（p.134）とする視点には古典と現代を結びつけようとする意図が明瞭に見てとれる。こうした記述が多ければすぐれた書になったであろう。著者の視点自体は正しいものである。自分の専門研究の意義を強調する本が最近多いが、少子化の中で全入時代を迎える大学人の自己防衛の反映のように感じるのは筆者一人であろうか。思えば大学には専門研究の美名の下<sup>もと</sup>に惰眠をむさぼっている者も多い。

佐久<sup>やすし</sup>協（2007.5）『ビジネスマンが泣いた「唐詩」一〇〇選』祥伝社は高校教師の筆者が漢詩の逐語的口語訳に飽き足りなさを感じ、「超訳」によって唐詩を日本語にしたものである。現代中国語で読む漢詩は「肩すかしを喰らったように呆気な」く（p.3）、五七調や七五調の訳にも同様の「呆気なさ」や「肩すかし感」を感じたのが「超訳」の始まりであると言う。たとえば杜甫の「貧交行」を次の様に超訳している（pp.140-141）。

翻手作雲覆手雨      雲という字の真ん中に手の平立てて「<sup>うん</sup>云」だけ見ても雲の意味／手を  
伏せて「云」を隠せば雨という字に早変わり  
紛紛輕薄何須数      言葉も心もコロコロ変わる輕薄時代  
君不見管鮑貧時交      管仲と鮑叔の裏表ない友情は  
此道今人棄如土      今や埋藏文化財

「一句目の雲と雨の対比の意味が不明なので、あえて解説(筆者注:「雲という字の真ん中に～早変わり」の訳のこと。)を加えてみた。読者の説を乞いたい。」(p. 142)という筆者の純粹な疑問の吐露には読む者に襟を正させる、研究者の誠実な探求心が見て取れる。

莫邦富(2007. 5)『中国は敵か、味方かー21 世紀最大の市場と日系企業』角川書店 角川 ONE テーマ 21 A-64 は「日本と中国は、それぞれの国益に基づく強固な関係を結ぶべきだ。その強固な関係は日中間の共同の利益を基礎に築かれるものでなければならない。それが日本と中国の政治家同士だけでなく、両国の国民の一人ひとりが背負うべき時代の課題である。」(p. 37)と述べ、1995 年頃から日本で叫ばれはじめた「中国脅威論」が無用のものであることを強調する。又、中国進出日系企業が「現地社会に溶け込み、きちんと貢献する企業市民であるべき」(p. 58)であると指摘する。中国企業については市場獲得、資源獲得、技術獲得の観点から海外進出が増大しており、中国商務省が 2006 年 1 月 6 日に発表した内容によると、2005 年末までに対海外直接投資額は累計 500 億米ドル、海外に設立した中国企業は 1 万社を超える見込みである(p. 215)と言う。

加藤陽子(2007. 6)『満州事変から日中戦争へ シリーズ日本近現代史⑤』岩波書店 岩波新書(新赤版) 1046 は『シリーズ日本近現代史全 10 巻』の第 5 巻として出版されたものである。東アジアの近現代史は日本、中国のいずれか一方の歴史だけでは成立せず、本書を中国関連書籍としてとり扱うのが妥当と考えとりあげることにした。

本書を通読して一番、印象に残ったのは「表 2-1 いわゆる対華二十一ヵ条要求の内容(要約)」(pp. 44-45)である。なかんずく英米に秘していた第五号である。〔第五号〕中国政府の顧問として日本人傭<sup>ようへい</sup>聘方勸告、基他の件の「一、中央政府に政治財政及び軍事顧問として有力なる日本人を傭聘せしむること」や「三、(前略)此際必要の地方における警察を日支合同とし、又は此等地方における支那警察官庁に多数の日本人を傭聘せしめ、以て一面支那警察機関の刷新確立を図るに資すること」等は現在から見れば内政干渉も甚だしいが 1910 年の日韓併合後の 1915 年に對華二十一ヵ条要求が出されていることを考えれば、日本が「武」の道、「力」の道を歩んでいたの証左が對華二十一ヵ条要求であったと言える。こうしたことについてのアクセントを置いた教育は現在の日本の中学や高校では行われて

いないのではないだろうか。

小林英夫 (2007. 7) 『日中戦争—殲滅戦から消耗戦へ』 講談社 講談社現代新書 1900 は「日中戦争とは、日本の殲滅戦略と、中国の消耗戦略との激突であったとみる」という視点をとる。殲滅戦略と消耗戦略という二つの概念は元来、石原莞爾<sup>かんじ</sup>がその著作 (1940) 『戦争史大観』の中で援用したベルリン大学教授デリブリュックの (1900) 『政治史から見た戦争史』中の概念である。石原莞爾はそれを決戦戦争と持久戦争と言い換え、更に第一次大戦の経験から、未来戦は決戦戦争だと予言した (p. 17)。殲滅戦を支える原動力は、軍事力や産業力などの、ハードパワーであり、消耗戦を支えるそれは、政治力や外交力、国家の文化的な魅力を含むソフトパワーであると言う (p. 5)。蒋介石は日本軍が「視野が狭く、国際情勢に疎く、長期持久戦には弱いという弱点を持っている」 (p. 65) ことを指摘し、ソ連留学中の息子、蔣経国に「倭寇<sup>わこう</sup> (日) の中国侵略を心配する必要はない。わしが必ず倭寇を制するからである」と書簡で書き送ったと言う。 (p. 44) 国民性の相違により日中戦争を読み解く書である。

吉田裕 (2007. 8) 『アジア・太平洋戦争 シリーズ日本近現代史⑥』 岩波書店 岩波新書 (新赤版) 1047 は既述の加藤陽子 (2007. 6) の後を継ぐ書であるが、同様の理由で紹介、報告することにする。本書では植民地の台湾でも 1941 年に皇民奉公会が結成され、「皇民化」政策が進展し、1945 年 1 月に最初の徴兵検査が実施されたことに言及している (p. 112)。満州国と朝鮮の関係では、朝鮮総督府が、農村の過剰人口対策の一環として、1936 年に鮮満拓殖株式会社を設立し、朝鮮人の満州移住政策を強力に推し進め、朝鮮人の間でも「満州」ブームが起こったことを述べる (p. 114)。1937 年 7 月に日中戦争が開始され、日本軍は同年 12 月に首都、南京を占領、翌 1938 年 5 月に徐州を、10 月に武漢を占領したが、国民政府の反撃に遭い、戦争は泥沼化し、アジア・太平洋戦争へと拡大していく。アジアの近現代史は一国だけの歴史ではなく、各国の関係性の中で考察していくことの重要性を考えさせてくれる日本近現代史基本の一書である。

#### [引用・参考文献]

- ・李年古 (2006. 9) 『日本人には言えない中国人の価値観 — 中国人とつきあうための 68 の法則 —』 学生社
- ・大石裕／山本信人編著 (2006. 10) 『メディア・ナショナリズムのゆくえ』 朝日新聞社 朝日選書 807
- ・田中直樹 (2006. 11) 『「反日」を超えるアジア』 東洋経済新報社
- ・田島英一 (2007. 1) 『弄<sup>もてあそ</sup>ばれるナショナリズム — 日中が見ている幻影』 朝日新聞社 朝日新書 027

- ・王敏（2006. 10）『日中 2000 年の不理解 — 異なる文化「基層」を探る』朝日新聞社 朝日新書 008
- ・王文亮（2006. 11）『格差で読み解く現代中国』ミネルヴァ書房
- ・松本浩一（2006. 11）『中国人の宗教・道教とは何か』PHP 研究所 PHP 新書 429
- ・阿辻哲次（2007. 1）『近くて遠い中国語』中央公論新社 中公新書 1880
- ・趙無眠 富坂聰〔訳〕（2007. 2）『もし日本が中国に勝っていたら』文藝春秋 文春新書 558
- ・齋藤希史（2007. 3）『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』日本放送出版協会 NHK ブックス〔1077〕
- ・佐藤一郎（2007. 3）『新しい中国 古い大国』文藝春秋 文春新書 563
- ・佐久 協（2007. 5）『ビジネスマンが泣いた「唐詩」一〇〇選』祥伝社
- ・莫邦富（2007. 5）『中国は敵か、味方か — 21 世紀最大の市場と日系企業』角川書店 角川 ONE テーマ 21 A-64
- ・加藤陽子（2007. 6）『満州事変から日中戦争へ シリーズ日本近現代史⑤』岩波書店 岩波新書（新赤版）1046
- ・小林英夫（2007. 7）『日中戦争 — 殲滅戦から消耗戦へ』講談社 講談社現代新書 1900
- ・吉田裕（2007. 8）『アジア・太平洋戦争 シリーズ日本近現代史⑥』岩波書店 岩波新書（新赤版）1047